

# 角川総一の 金融 逆さメガネ

この間、今年で創刊130周年を迎えた、ある大手経済新聞社系列の情報ベンダー会社主催のセミナーで話す機会があった。

受講者は、メガバンクから生命保険会社、信用金庫に至る幅広い金融機関の、営業企画ならびにテール渉外担当セクションの方々であった。

もちろん、彼らが営業企画なり渉外活動展開（特に投資信託の販売）のヒントを得るためにお越しになっている以上、それに絡んだテーマを取り上げたのは当然。私が組上に乗せたのは、主に「デー

## 第57回

# ドル相場と金価格の関連性をデータをして語らしめると…

金融商品の説明にあたっては、論より証拠で、データをして語らしめることが有効。今回はそのことを、対ユーロでのドル相場と、金価格の関係を例に示そう。

らかじめ半製品（レディメイド）のテンプレートを使いながら説明しよう」といったテーマだった。ファクトデータやチャートで論よりも証拠を示す

このうち多くの方が関心を抱いてくださったテーマの一つは、「データをして語らしめるカルチャー」であり、その中でも「論よりも証拠としてのデータ、チャートを提供することが極めて有効である」ということだった。

例えば、初歩的なレベルで言うと「債券と株式相場は往々にして逆に動きがち」「円安はほぼ確実にわが国のインフレ率を引き上げる」といった理屈だけではなく、実際にそれを証するデータ、チャートを利用するといったこと。

あるいはもう少し応用編になると、「米FRBレートが上げ止まる前に日経平均株価は下落に向かいがち」といったある種の法則めいたものについて、理屈だけではなく、それを一目で了解するためのファクトデータ、チャートの有用性についてお話しした。

まあ全体としては、「銀行などが国債の窓口販売を開始してからすでに20年、投資信託の窓口販売スタートからでもすでに8年。にもかかわらず、データをしてモノを語らしめるという文化がまだ根付いていない」というトーンでお話しさせていただいた。

## データ間の因果関係をより分かりやすく見るには

ところで、投資信託をすでに購入している、あるいは購入を検討しておられる個人顧客にとっても重要なテーマが、為替レートと国際的なレベルでのインフレだと思ふ。もう少し具体的な商品ベイスに絞り返すと、「ドル相場」と「金価格」などについて、トピックとして意識されている人が多と思う。

であれば、「ドル相場」と「金相場」の関連性について示されるファクトデータ、チャートが用意されていていいはずだ。

一般には（教科書的には）、「ドル相場と金の価格とはトレードオフの関係にあることが多い」と解

説される。ただ、この場合の「ドル相場」として多くの人は「対円」の相場を想起されることが多いと思う。

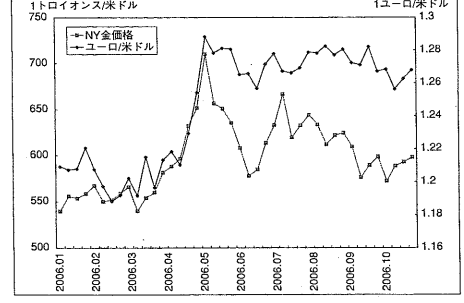
しかし、世界一の為替売買が行われているロンドンのシティにおいては、日本円の売買高は米ドル、ユーロに一步を譲る。あるいは米国在住のアメリカ人が「米ドル高」「米ドル安」といった場合には、まず第一義的には「対ユーロ」でのドルの高安であることが多い。

ドル相場」と「金価格」の関係を示したのが図表1である。過去約1年間の「対ユーロでの米ドル相場」と「ニューヨークマーカンタイル取引所での金先物価格」との間には相当程度の逆相関が働いていることが分かる。つまり、米ドルがユーロとの比較において売れる時期に金は上がり、米ドルが買われるときには金価格は下がる傾向が明らかに見て取れる。

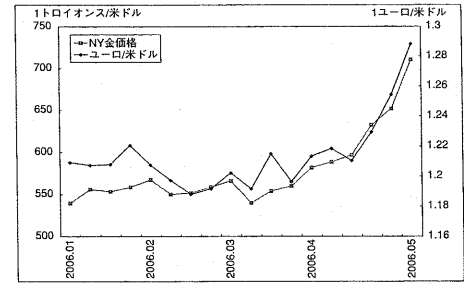
はちよつと分かりにくい。5月第1週から第2週にかけて金価格の下落率が相当大きかったために、このグラフではその後の関係が読み取りにくくなっているのだ。この場合、これらの諸データの関係性について分かってもらうためには、図表2・3・4のように時期を分けて、これらのデータの関係を示したほうがはるかに分かりやすいことが少なくない。

と、その関係は若干薄くなっているものの、相当程度の逆相関が働いていることが分かるはずだ。経済データ間の関係は、いくつかの節目ごとにその様相が若干異なることは珍しいことではない。この場合、その節目ごとに別のグラフで示すほうが、双方の因果関係がより直接的に理解できるというケースが少なくないと思う。

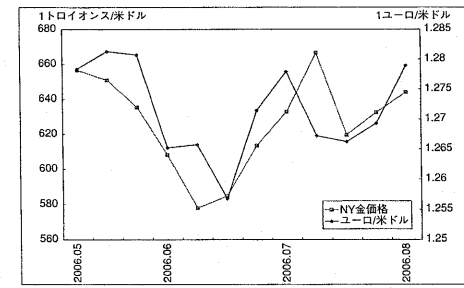
図表1 確かに米ドル相場とNY金価格とはトレードオフの関係にある



図表2 5月第1週までの動き



図表3 5月第2週～8月第1週の動き



図表4 8月第2週以降の動き

